

佳作

「『医療の一端を担う者』を実感した瞬間」

染谷秀孝（明治製菓株式会社 医薬企画業務部）

最近、医療現場を舞台としたテレビドラマをよく見かける。そのようなドラマの中で脇役ではあるものの「MR」という職業が顔を出す機会が増えている。ドラマの中でのMR像は概ね、院内事情通の営業マンであり、性格はお調子者の太鼓持ちであることが多い。我々MRを経験した人間から見るとその中で描かれるMR像は一部分としては思い当たるところがあるものの、決して全体像を捉えたものではない。私は自身の16年間に及ぶMR経験から、もう少し本来のMR活動の現状や医療担当者との関わりについて理解を頂くためここに筆をとった次第である。

私どもの仕事がプロパーと呼ばれた時代から現在の呼称であるMRに変更されて以降、MRは本来業務である医療用医薬品の情報伝達を仕事の本流とする時代へと変革した。医薬情報担当者(MR)教育センターが設立され、製薬業界がMRの資格を認定する時代となった。

私の所属する企業では業界が認めるMR認定試験合格を最低基準であるAレベルとして、その上にB、Cレベルの2段階に及ぶ更なる専門知識を習得したMRであることを社内で認定する制度がある。MRは自己研鑽のなかで、より高度専門知識を習得し、特定の治療分野においては医療担当者と対等、あるいは治療上のアドバイスを与えられるレベルに至る者も出現してきた。

一方、医療機関ではEBMが重視され、大規模臨床試験や統計学的に信頼性に足る複数のデータに基づいて根拠が明確となった治療法を優先する考え方が主流となってきた。

「MRは医療の一端を担う者」と定義されているが、私の経験として最もそれを実感した事例を以下に紹介する。

私が基幹病院を担当していた頃の話である。当時、医療法の改正により、病院は院内感染を未然に防止するため、様々な院内感染対策を講じることが求められていた。感染症領域を中核としている私どもの会社では消毒剤や感染症治療薬のラインナップが充実していることに加え、当時、院内感染の起因菌として問題となっていたMRSAを適応菌種とする唯一の治療薬を持合わせていた。院内感染を防止するためには医療従事者自身が感染の伝達媒体とならないために「1処置1手洗いの励行」などが重要であり、感染を未然防止する

ための対策が喫緊の課題であった。院内感染症対策委員会の活動が現在ほど一般的でなかった時代に私は、部外者ではあるものの対策委員会の立上げから検討会に加わり、具体的な海外における対策の状況や既に様々な対策を講じて成功している医療機関の事例などについて情報提供を行い、病院職員への啓蒙活動の一環として手洗いの重要性について消毒剤説明会の実施や啓蒙グッズとして手洗い場への手洗いシールの提供などを行った。医師・薬剤師に対しては実際に感染症が発生した際の薬物療法としてどのような選択肢があるのかなどの情報を提供した。薬物治療においてはテーラーメイド医療（十人十色、個別の患者様に最適な薬剤および最適な投与方法が選択される医療）が求められるため、私どもは TDM（血中濃度モニタリング）の解析ソフトを紹介し個々の患者様の状態に応じて最適な投与方法が選択されるよう情報提供を行った。その結果、この病院で大きな問題となっていた院内感染は激減するに至った。何よりも嬉しかったのは MRSA に感染し死亡に至る可能性のあった多くの患者様を私共の予防から治療に至るまで一連の情報提供等により救えたという実感である。この時、私は正しく自分が「医療の一端を担う者」であるという自覚と認識を新たにし、直接、情報提供を行う医療担当者の先に患者様という最終消費者が存在し、全ては患者様のために我々 MR の情報提供は活かされていることを再確認した。病院職員からは非常に感謝され、その後も高い信頼関係を維持するに至った。事、実績に関して述べると MRSA が蔓延し、治療薬が多く使用されていた時期に比べ売上は半減し、短期的には実績を落とした形となるが、脈々と手洗い等で使用される消毒剤や一連のやり取りのなかで構築された信頼関係により さんが情報提供を行うのであれば安心して薬剤が使用できるという流れとなり、長い目で見れば大きな足跡を残すことに成功した。

現在、世間一般から見た MR の認知度はまだまだ低いため、「医療の一端を担う者」として十分成熟していない時代の「売上げ重視の営業マン」的色眼鏡で見られがちだが、現役として活躍する多くの MR が自信と誇りを持って医療用医薬品の適正使用に資する正しい情報提供を行い、その先に患者様が存在するということを常に意識して行動していくことが世間一般からみた MR 像の改善と認知に繋がるものと確信している。

以上